

第4章 京都大学本部構内AT27区の発掘調査

五十川伸矢

1 調査の経過

本調査区は、京都大学本部構内の東南部、吉田神社表参道入口のすぐ北側に位置する。ここに吉田地区本部構内実験排水槽が設置されることになったため、昭和53年度、予定地に2ヶ所の試掘坑を設け、遺跡の確認と層位の観察を行なった〔京大埋文研79〕。その結果、小礫が堅く踏みしめられた面を検出し、道路の存在が確認された。また古代から近世に至る遺物の包含層の堆積がみられたため、新営予定地全域の発掘調査を実施することになった。本調査区北東約200mのAW28・AX28の両区では、昭和53・55年度に発掘調査を行ない〔京大埋文研80〕、近世の白川道の遺構を明らかにしたが、この本部構内の地には、幕末に尾張徳川藩邸が存在し、明治20(1887)年、その跡地に第三高等中学校が創設され、これが京都大学に受けつがれて現在に至っている。

発掘調査は2月に開始したが、調査区東半部で奈良時代の竪穴住居跡が発見されたため当センターでは保存を要望し、関係当局と協議の結果、埋め戻しのうえ保存の運びとなった。これに伴ない実験排水槽の建設計画が変更され、西側の地域を追加調査し、あわせて515㎡を調査することでAT27区の発掘調査を完了した。なお3月23日に現地説明会を開催し成果の一部を公表したが、その後の知見も加えて報告を行なう。⁽¹⁾

2 層位

調査区一帯は、吉田山の西麓にほど近く、北白川扇状地の南端部にあたる。現地表の標高は57.5m前後であり、東から西に緩かに傾斜する。表土下の層位は東西で若干異なっている(図6)。西半部では基本的には表土(第1層)、暗灰色土(第2層)、赤褐色土(第3層)、暗褐色土(第4層)、黄砂(第7層)の順に堆積がみられる。暗灰色土は近世以降とみられるが調査区西壁面の観察から2層に分層でき、上層は近代、下層は近世のものと考えられる。部分的には灰褐色土(第5層)が赤褐色土の下にみられる。赤褐色土と暗茶褐色土は鎌倉時代～室町中期ごろの遺物を包含している。赤褐色土上面には遺構はほとんどみられず、赤褐色土と暗茶褐色土を除去した段階で古代・中世の遺構を検出した。一方、東半部では表土の下に暗灰色土を介して茶褐色土(第6層)があり、その下に黄砂が堆積している。茶褐色土は粒子が細かく遺物を含まず、本部構内一帯における歴史時代の遺構の基盤となっている。

調査区中央部では遺構(不定形土坑)が深くまで及んでいたため、深掘りを行ない古代・中世の遺構の基盤となる堆積層の状態を観察したが、黄砂の下に白色粗砂(第8層)、黄褐色土(第9層)、白色細砂(第10層)、黄灰色シルト(第11層)が続き、その下に砂礫(第12層)が存在することを確かめている。砂礫層上面の標高は55.2mである。また黄砂は調査区東半部では堅くしまっているが、西半部では層が薄く、崩れやすい白砂層がそのすぐ下にみられる。

また調査区東南部は、第三高等学校・京都大学設立以降の大規模な攪乱を受けており、煉瓦を含んだ黒褐色土や暗灰色土が、地表下1.5mまで堆積しており、その下にすぐ黄砂をみいだすという状態であった。

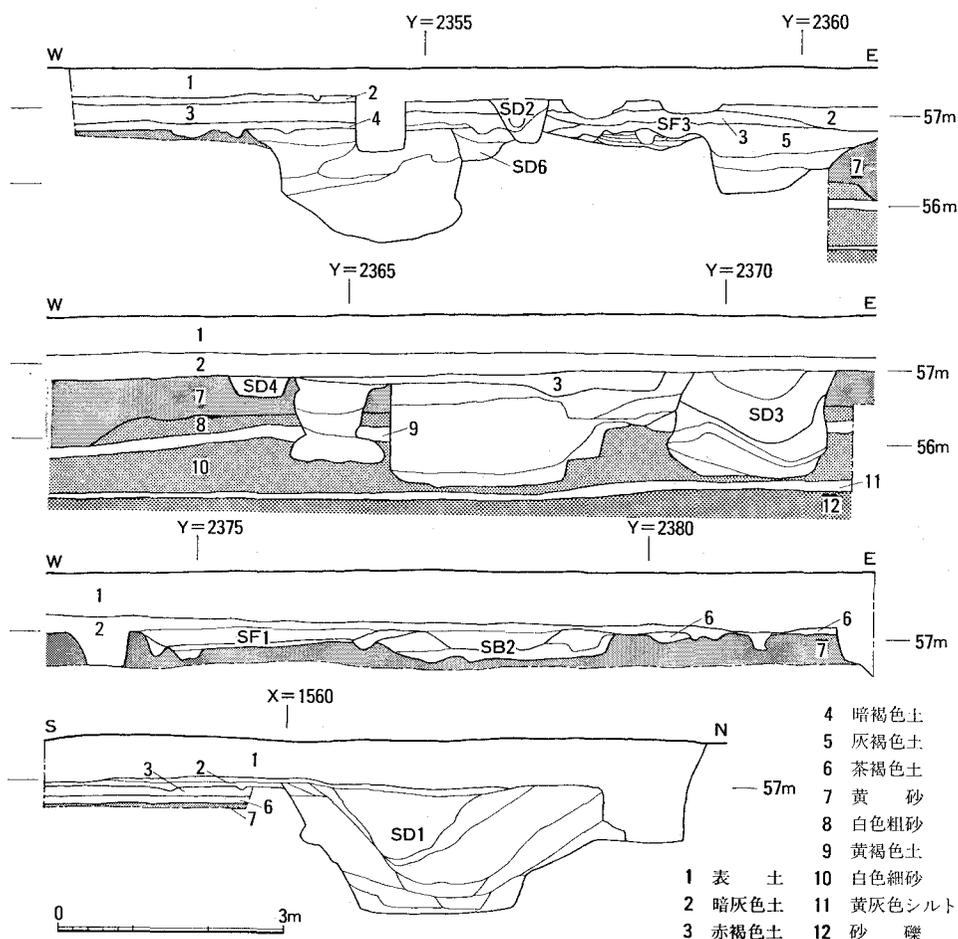


図6 中央畔南壁(上3段),西壁(下)の層位

3 遺構と遺物

検出された遺構には竪穴住居、溝、堀、野壺、土墳墓、土坑などがあるが、これらは古代・中世・近世の遺構群として類別することができる。これらの遺構群は、それぞれ性格を異にしており、この地の土地利用の歴史の変遷を物語っている。そこで近世・中世・古代の順に、検出した遺構とそれぞれの遺構から出土した遺物についてあわせて説明を行なう。

(1) 近世の遺構・遺物

道路SF1(図版8, 図7)
Y=2375付近に南北に続く道路SF1を検出した。前述の攪乱によって南半部は完全に破壊されていた。全体にやや西に傾斜しており断面の観察からI~IIIの3枚の路面が認められた(図8)。いずれの面も小礫を一面に敷きつめて一種の舗装を行なっている。東側には幅約20cmの側溝を伴なう

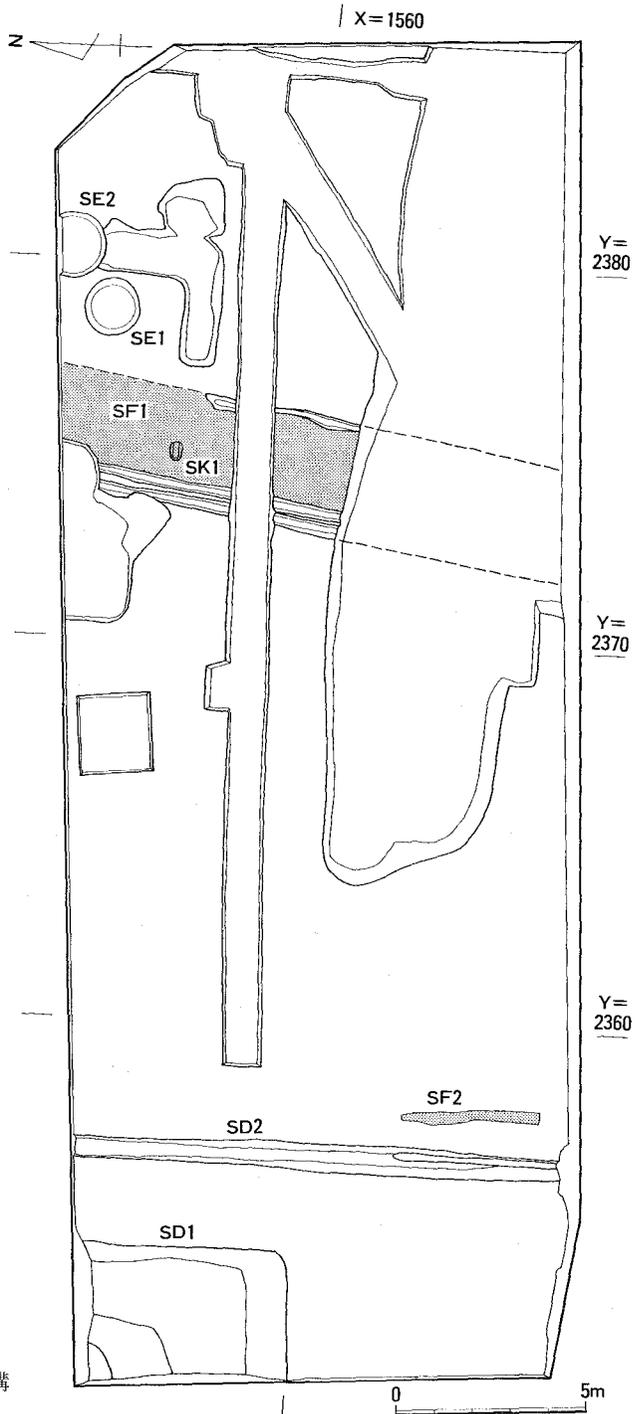


図7 近世の遺構

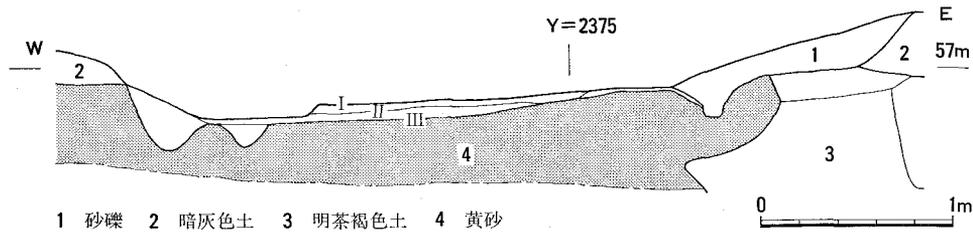


図8 道路SF1の断面

が、底部が平坦ではなく凹凸がみられ途中で立ち上がる。この東側溝は路面Iに伴なうものである。また西側には2本の側溝がみられるが、いずれも路面IIIに伴なうものであり、路面IIの段階では埋まっていたと考える。検出状況からみて2本の西側溝のうち西側のほうが新しいと判断され、路面IIIの時期のうちには路面の西側への拡張があったことが判る。道路の最大幅は2.5mで、本部構内の立合調査により、この道路は北北東に延びて白川道にぶつかることが推定される(図21A・B)。

道路SF2(図7) 近代以降の破壊を受けたため、島状に小さくその痕跡をとどめているのみであるが、小礫を堅くたたきしめた構造についてはSF1と軌を一にする。道路幅や方向は明確ではないが、後述する堀SD1、溝SD2との関連から南北方向に走るものであったと推定される。

堀SD1(図版9-2、図7) 幅4.5m、深さ1.5mの断面逆台形を呈する溝で、調査区西北部で直角に折れ曲がる部分が検出された。方位は、ほぼ真南北、真東西を示し、暗灰色土上層を除去した段階で検出した。層位を観察すると一定程度の埋積の後、北西側から数段階に土砂が流入して埋積したようで、後半の埋積は人為的なものであり、長期間存続したとは思えない。埋土から陶磁器を中心に大量の遺物が出土した(図9 II 2～II 12)。II 2は灯明皿。II 3は皿で口縁端部から内面にかけて施釉している。II 4・II 5は染付小椀。II 4は「賀」と「寿」を交互に描く。II 5はAW28区SD1上層出土品〔京大埋文研80第15図II 30〕に類似する。II 6・II 7は灰色の釉がかかる椀。底部外面にII 6は「上」、II 7は「小善」の墨書があり銘々椀であろう。II 8は扁平な蓋で釉は灰緑色。II 9は円筒形の鉢で茶褐色の釉がかかる。II 10は3合入りの爛徳利で釉は淡赤褐色。II 11は淡黄色の釉がかかる鍋、II 12は褐色の釉がかかり、とびカンナ状の文様を外面に施す鍋。これらはAF14区SE01〔京大埋文研78a第16図〕より新しく、19世紀のものと考えられる。

溝SD2(図7) 幅0.7m、深さは北端で0.2m、南端では0.8mと南へ深くなるV字形をなす溝である。SD1と同じくほぼ真南北方位を示し、近世の瓦が出土した。

野壺SE1・SE2(図7) 道路SF1の東側に接して野壺が2基存在する。いずれも漆喰で直立する円筒形の枠とすり鉢状の底を作る構造で、SE1は一度作りなおされている。また東南部の攪乱土中からは漆喰の断片がかなり出土しており、この他にもいくつか野壺が存在した可能性がある。

土坑SK1(図版9-1, 図7) 道路SF1の路面Ⅲを除去して検出した。東西60cm, 南北30cmの楕円形掘形の中に、幅20cm, 長さ50cmの刳抜いて作ったU字形をなす板がおさまり、その西端の一段高くなった所に有蓋壺(図9 II13)が置かれていた。有蓋壺の外表面には有機物が付着し布様のものに包まれていた可能性がある。内部には木炭と砂が詰まり、底部には土師器皿(II1)が伏せた状態でおさまっていた。蓋は径14.5cmで天井部は扁平、口縁部外面に2本の凹線をめぐらす。壺は扁平な底部に丸い胴部をもち、口縁端部は玉縁状になって蓋をうける。土師質に焼成されており、一般に胞衣壺と呼ばれているものである。土師器皿は見込み外周部に沈線を施し、口縁端部は少し内側に屈曲する。同志社女子大学図書館建設予定地出土の同様の有蓋壺は、宝永5(1708)年以降のものと考えられているが(同志社調査会76)、II13も共伴した土師器皿からみて18世紀ごろのものと思われる。また同志社女子大学出土の有蓋壺は周囲に礫を配することから蔵骨器と報告されているが、SK1においても板の上にこれを置き内部に木炭や砂をおさめることから同様な性格をもつものではないだろうか。

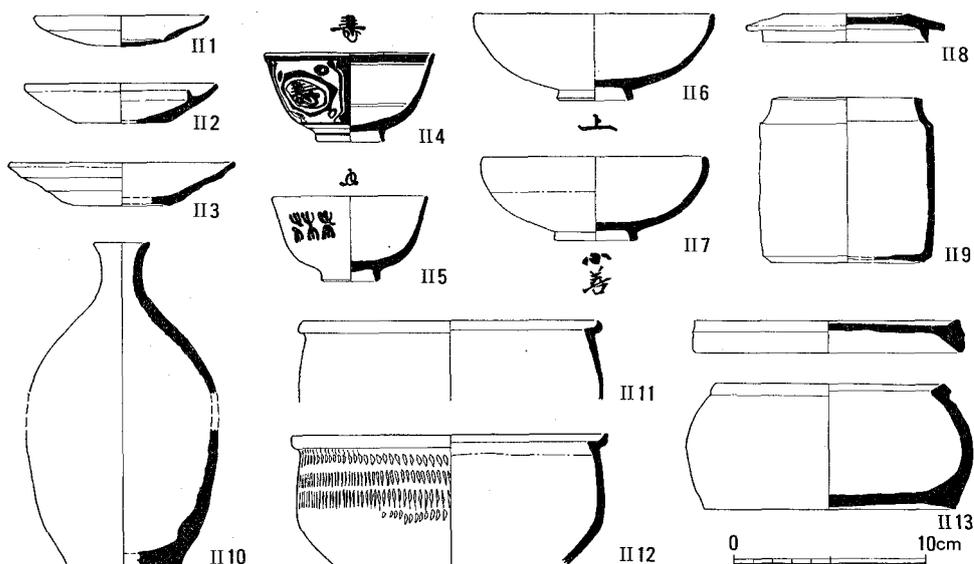


図9 SK1(II1・II13土師器), SD1(II2・II3・II6~II12陶器, II4・II5染付)出土の遺物

(2) 中世の遺構・遺物(図版10-1)

土壙墓S K 2 (図12) 北半は攪乱をうけているが、南北に長い楕円形の掘形と思われる。人骨の脛部が出土し、その遺存状況から膝を曲げて北枕に直葬されたと推定できる。

土壙墓S K 3 (図版10-3, 図10・12) 平面不整形で、すり鉢状をなす掘形の底に1.0m×2.1mの長方形の浅い掘り込みがある。その底部で鉄釘(図11Ⅱ14~Ⅱ17)と木片が出土した。鉄釘の分布状態から0.6m×1.8mの木棺の存在が推定される。鉄釘の方向を検討すると四辺に垂直方向のものがみられるので、棺は底板の上に側板と小口板が載る構造であろう。また隅の部分には側板、小口板の両方向に打ち込まれた筒所があるのは、側板と小口板との結合が組接くみつきであったことを示すものであろう。鉄釘に残る木目痕から棺材の厚さはほぼ1.5cmと判断される。また棺内西北隅から11~12世紀初頭の定窯系劃花蓮弁文白磁小碗(図13Ⅱ37)が出土した。副葬品と考えられるが、遺骸は北枕に伸展葬されていたのであろう。なお木棺の主軸方向は真北から約8°東に振る。

土壙墓S K 4 (図12) 南北に長い楕円形の掘形をもち、底面で鉄釘を多数検出した。

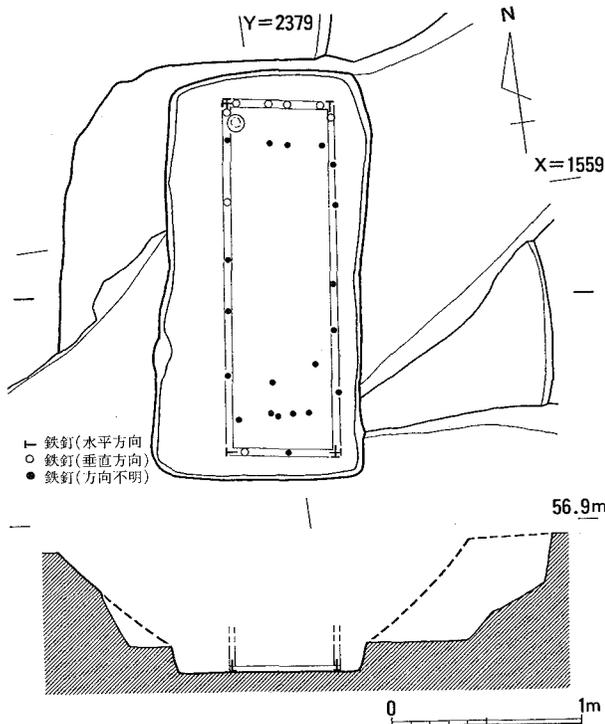


図10 土壙墓S K 3

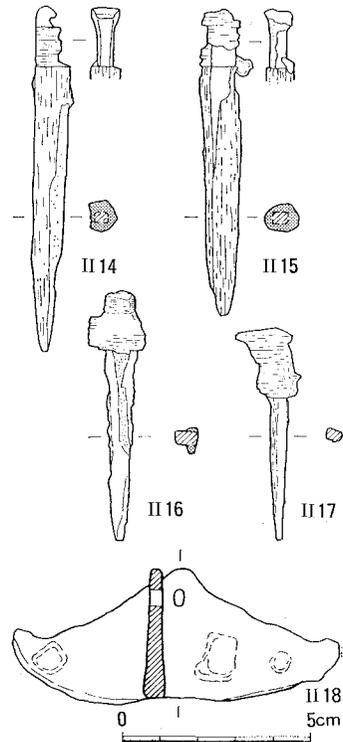


図11 鉄釘, 火打金

鉄釘の分布状態から0.4m×1.1mの木棺が存在したことが判るが、鉄釘の遺存状態が悪いのでSK3のように棺材の結合方法を推定することはできない。主軸は真北から約8°東に振る。副葬品はないが埋土中から土師器皿(図13Ⅱ27)が出土した。Ⅱ27は底部外面に回転糸切痕、体部下半には轆轤水びき痕を残す。

土壙墓SK5(図12)

南北に長い隅丸方形の掘形をもち、近世以降の攪乱によって底面近くまで破壊されていた。南辺部で垂直方向の鉄釘が2本検出された。

不定形土坑(図12) 調査区の西半に大小様々な掘り込みが多数検出されたが、これらは底がシルトや砂礫層に及んでおらず、砂を採取するために掘った跡と考えられる。これらのうちには後述の溝SD3に切られるものや逆にSD3を切るものもあり、かなり長期に

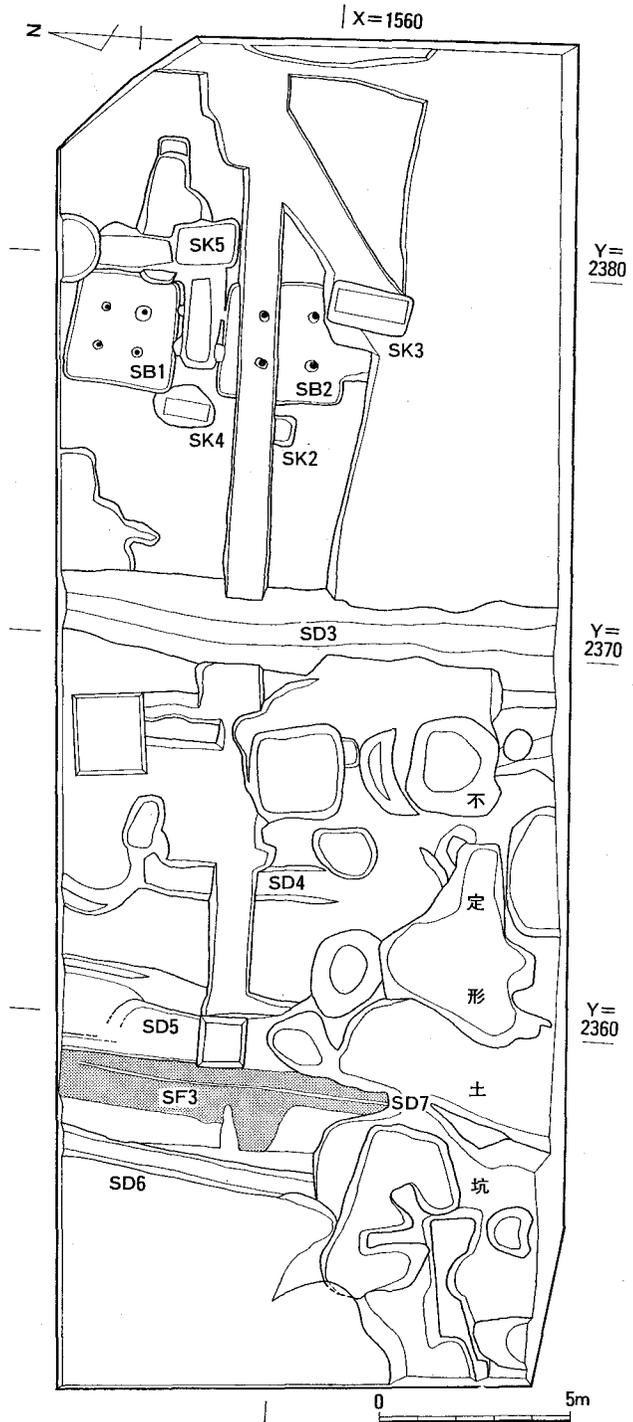


図12 古代・中世の遺構

わたって掘削されたものと考え。埋土中の遺物は少量で細片が多いが11世紀から13世紀にいたる土師器、陶磁器を含み、火打金(図11 II 18)が1点出土した。

溝SD3(図12) 幅2.5m、深さ1.5mでV字形をなす。方位は真北からやや東に振るが、諸配管埋設工事の立合調査で北への延長を確認しており(図21C)、その間ほぼ真南北に続くようである。埋土は上下2層にわかれ、上層からの出土遺物(図13 II 22・II 26)は少ない。下層からは土師器、瓦器、陶磁器、瓦など多数の遺物が出土した(図13)。

II 19~II 27は土師器皿。II 19は2段撫で面取り手法 C₅⁽²⁾類、II 20・II 21・II 25は1段撫で面取り手法 D₅類、II 22・II 26は D₆類、II 23は「て」字状口縁手法 B₄類、II 24は2段撫でつまみ上げ手法 C₄類で、平安京Ⅲ期から中世京都Ⅰ期ごろのものが含まれているが、上層は中世京都Ⅰ期のものに限られる。II 28は瓦器椀で口縁端部内面に沈線を施す。内面には螺旋状暗文がみられ、橋本久和のいう第Ⅲ期に相当する〔高槻市教委80〕。II 29はミニチュアの瓦器羽釜。口縁部が内彎し三脚がつく。II 30は瓦器盤で口縁端面が丸味をもち端部が内側に肥厚する。II 31は須恵器で宇野隆夫のいうすり鉢4類〔宇野81 p. 78〕にあたる。II 32は瓦器鍋。口縁部の屈曲は比較的顕著で内面に刷毛目を施す。II 33は白磁皿。口縁端部が外折し乳白色の釉調を呈する。白河北殿北辺の調査E12層出土品〔京大埋文研81図版

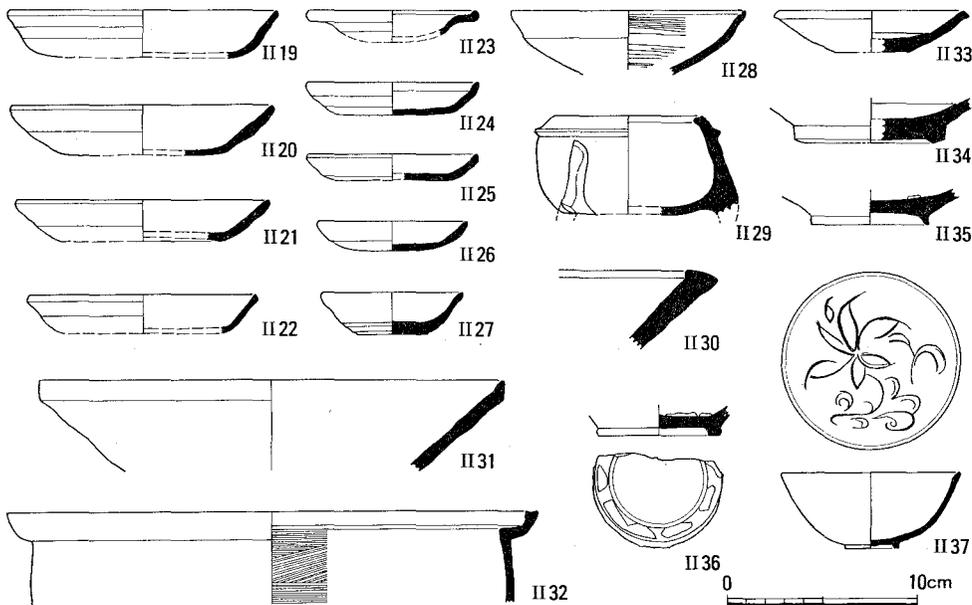


図13 SD3 (II 19~II 26土師器, II 28~II 30・II 32瓦器, II 31須恵器, II 33・II 34白磁, II 35緑釉陶器, II 36青磁), SK 4 (II 27土師器), SK 3 (II 37白磁) 出土の遺物

22-343]と類似する。Ⅱ34は白磁碗底部で高台の削り出しはわずかで見込み周縁に沈線をもつ。横田賢次郎・森田勉のいう白磁碗Ⅳ-1・aに相当する〔横田・森田78〕。Ⅱ35は緑釉陶器碗の底部。胎土は青灰色で須恵質に焼成され濃緑色の釉調を呈する。内外面に目痕が残る。Ⅱ36は越州窯系青磁碗の底部。釉調は黄緑色を呈し底部内面と畳付部に目痕がある。以上の遺物からSD3は13世紀中葉ごろ埋積したと考えられる。

溝SD4・SD5・SD6(図12) ともに不定形土坑によって寸断されているが、南北に走る溝である。埋土は黒褐色砂質土で遺物を含まない。SD5・SD6は真北から約8°東に振る方位を示す。

道路状遺構SF3(図版10-2, 図12) 堅くしまった黒色土層が東西1.4~2.2m, 南北8.6mにわたって分布する。黒色土層は2~3枚あり、その間には砂層の堆積をみる。これはAX28区の南端で検出した堅い面〔五十川80〕に類似し、道路と推定されるがSF1のような近世の道路とは構造を異にし検討を要する。SD7は幅0.2mの細い溝でSF3上にあり轍とも考えられる。SD6も西側溝の可能性がある。SF3は不定形土坑に切られており鎌倉時代以前のものであろう。

(3) 古代の遺構・遺物

竪穴住居跡SB1・SB2(図版11, 図12・15) 調査区の東半では堅くしまった黄砂がみられるが、これに掘り込んで作られた竪穴住居跡を2棟発見した。2棟の竪穴住居は南北に並んでいる。SB1は隅丸方形の平面形を呈し2枚の床面をもつ。下の床面は南北2.7m, 東西2.5mで、その後西へ拡張を行ない、上の床面では東西2.8mになっている。柱穴は4つで柱間は1.0m前後である。柱穴の方位は真北から約8°東に振る。床面には炉や溝の痕跡はなく、壁面は残りの良い部分で下の床面から0.3mを測る。下層から須恵器杯蓋(図14Ⅱ38), 土師器杯(Ⅱ42), 上層からは須恵器杯(Ⅱ41)・杯蓋(Ⅱ39)・鉢(Ⅱ40), 土師器鍋(Ⅱ44), 製塩土器が出土した(図版12)。

SB2は東南部を土壙墓SK4に切られているが、隅丸方形の平面形を呈して2枚の床面をもつ。下の床面では南北3.0m, 東西2.8mを測るが、上の床面では3.3m×3.2mとやや広く、西と南へ拡張していることが判った。柱穴は4つで柱間は南北1.4m, 東西1.35mである。竪穴と柱穴はともに真北から約1°東に振る。下の床面では中央部西寄りに小規模な炉と、中央部から南へ延び住居の外に続く溝とを検出した。壁面は残りの良い所で下の床面から0.3mを測る。下層から土師器壺(Ⅱ43)が出土した。以下出土遺物について記述する。

Ⅱ38・Ⅱ39はともに須恵器杯蓋であるが、Ⅱ38は天井部から口縁部にかけて緩やかなカーブを描き口縁端部は下方に短く屈曲する。Ⅱ39では天井部と口縁部との境界は段をなし端部は下に短く屈曲し、Ⅱ38より新しい様相を呈する。これは出土層位の上下関係に符合する。Ⅱ40は肩部が鋭く屈曲し口縁は外方へ屈曲する。器高に対し口径が広く内面の底部付近は磨滅しており、すり鉢としての使用が推定される。Ⅱ41は須恵器杯。口縁はまっすぐ立ち上がる。Ⅱ42は土師器杯で内面に斜方射暗文を有し、丸く内側に巻き込む口縁部をもつ。Ⅱ43は球形の胴部から短く屈曲する口縁のつく土師器壺で、外面にはあらい刷毛目を施す。Ⅱ44は口径48cm、高さ16cmでひらたい器形をなす。内面には同心円文が、外面には細かい刷毛目が残る。器壁が薄く外面に煤が残り、鍋と判断される。このほか砂粒を混じえた胎土で内面に布目痕を残す製塩土器の小片がある⁽³⁾。これらの遺物は、貯蔵、調理、煮沸、供膳のための容器であり、平城宮Ⅲ～Ⅳの時期(8世紀中葉)のものと考えられる〔奈文研76a〕。

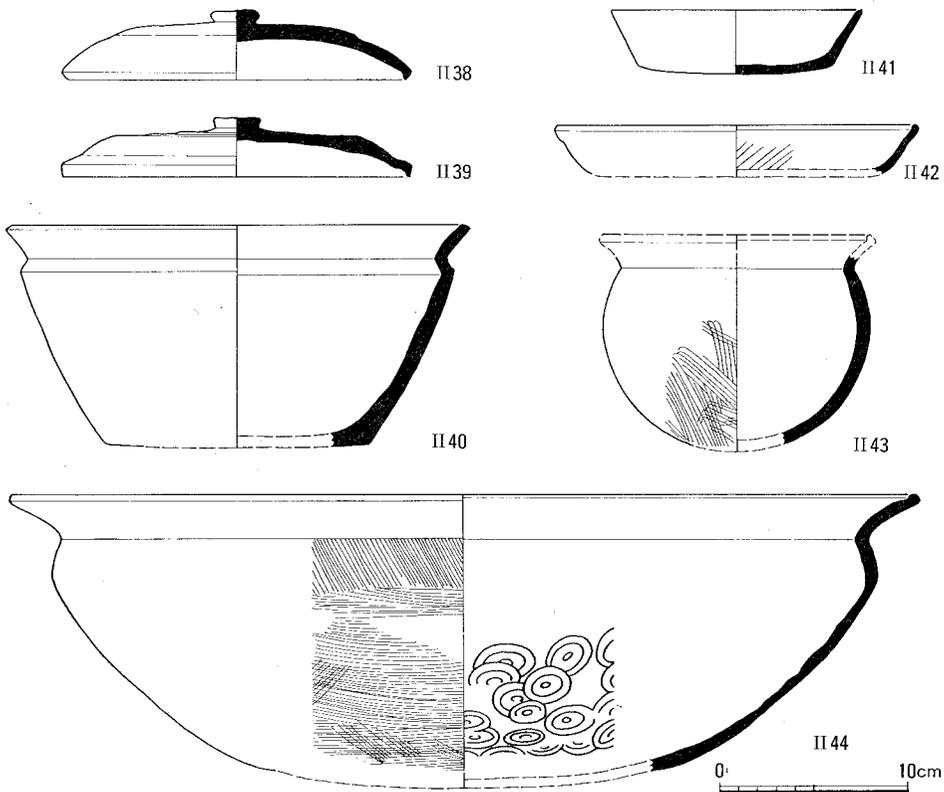


図14 SB1 (Ⅱ38～Ⅱ41須恵器, Ⅱ42・Ⅱ44土師器), SB2 (Ⅱ43土師器) 出土の遺物

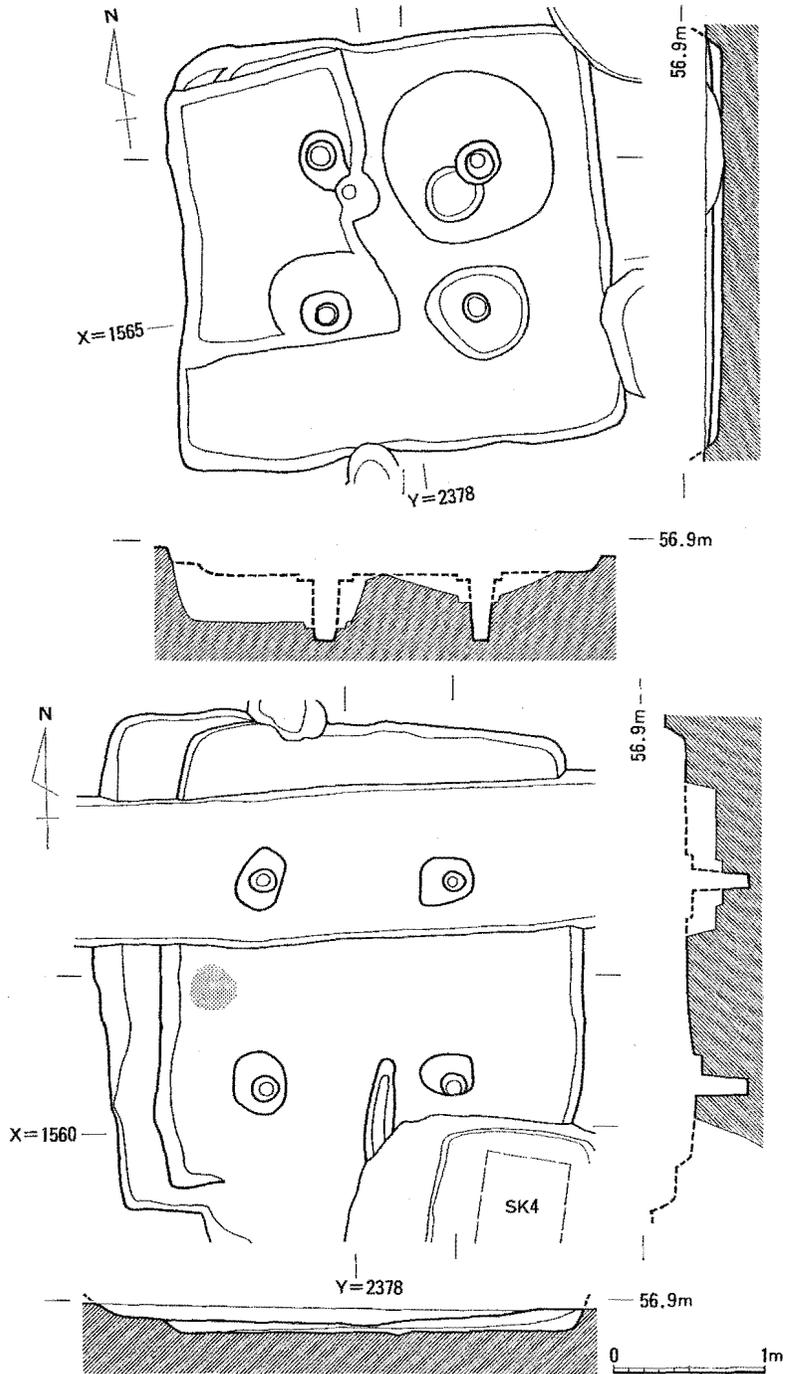


図15 竪穴住居跡SB1(上)・SB2(下)

4 小 結

第3節では本調査区で検出された3つの遺構群とその出土遺物について述べたが、最後にそれぞれの遺構群によって当時の景観を復原し、土地利用の変遷について考察を行なう。

まず近世後期と考えられる遺構には、道路SF1・SF2、堀SD1、溝SD2、野壺SE1・SE2がある。堀SD1は相当しっかりしており江戸末期のものと考えられるが、この地には文久2(1862)年から明治3(1870)年の間、尾張徳川藩邸が置かれたことが『京都坊目誌』にみえる。また「改正京町御絵図細見大成」慶応4(1868)年版には、白川道を切断して尾張屋敷が描かれている。この藩邸については名古屋市蓬左文庫所蔵古絵図のなかに「吉田御屋敷惣図」が現存しており、その規模や形態を知ることができるが、これによると屋敷の四周には幅広い空堀がめぐっている。屋敷の外郭の形態や屋敷内にみられる水路と明治25(1892)年ごろの第三高等中学校の敷地内に存在した水路(図16)との対応関係から、本調査区西域は藩邸の東南隅に相当しSD1が惣図に記された空堀であることが考えられる。さらにSF2を藩邸東側を南北に通じる道路、SD2をその西側溝と考えるならば、この道路の南への延長は現在の吉田上大路町と吉田二本松町を画する道路にほぼつながら、幕末におけるこの付近の道路のあり方が明確になってくる。

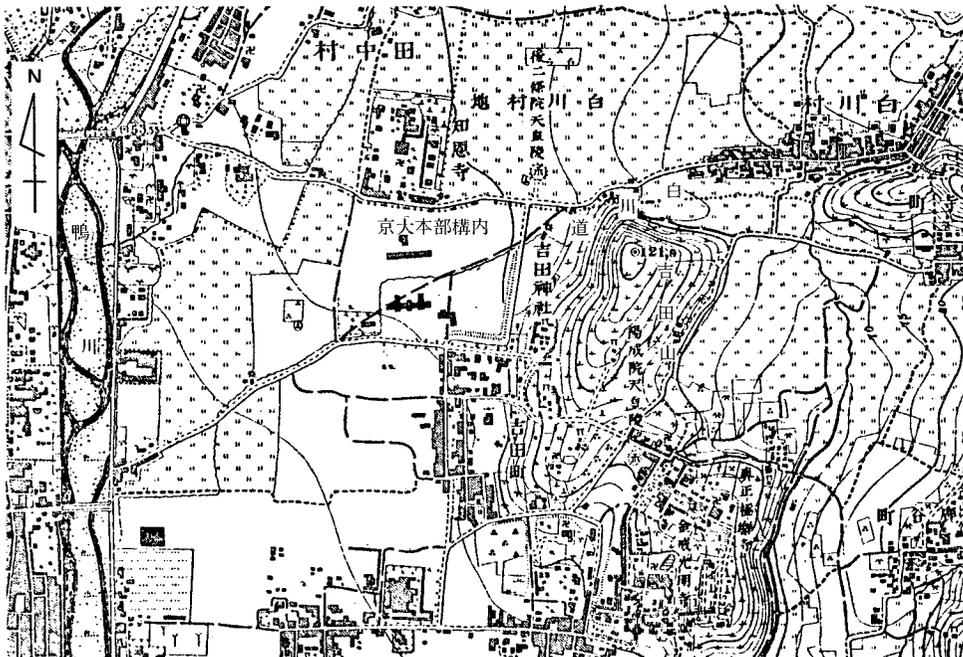


図16 京都大学周辺の道路 縮尺 1/20,000 (明治25年仮製2万分1地形図)

また道路SF1は本部構内の立合調査によって北北東に続くことが確認されており、かつて京大本部構内の地に南西から北東にむかって伸びていた白川道にぶつかると考えてよい(図16)。吉田神社の西側を南北に走り白川道にぶつかる道路は、「増補再板京大絵図」寛保1(1741)年版などに記載されており、SF1はこれに該当するであろう。SF1の東側には野壺SE1・SE2が存在し、当時沿道には畑が広がっていたと考えられる。また近世白川道〔京大埋文研80〕に比べ道幅も狭く轍もみられないことから、道路SF1は車輛の往還がそれほど頻繁ではなかったのであろう。

道路SF1は路面Ⅲ直下から検出した有蓋壺内の土師器皿などから、江戸中期以降のものと考えられる。そして幕末に至るまで調査区一帯は畑が広がり、のどかな農村の景観を呈していた。しかし文久2年尾張徳川藩邸設置にともない屋敷を区画する堀が設けられ道路も堀の東寄りに移されたが、明治20(1887)年第三高等中学が設立されたため、この道は廃絶した。調査区の近世以降の景観変遷は以上のように考えられる。

次に12~13世紀ごろの中世の遺構群から当時の景観を復原してみよう。

調査区の東半にはSK2, SK3, SK4, SK5の土壙墓が存在し墓地を形成しているが、SK3では当時の土壙墓では副葬品が少ないなかであって、類例の僅少な定窯系白磁小椀を棺内に供えるなど注目すべき点が多い。10世紀ごろ神楽岡西麓、現在の京都大学の地には吉田寺が存在し、この吉田寺に関連して吉田卒堵婆供養所があり葬送所としての役割を果たしていた(杉山54)。また『権記』長保3(1001)年9月26日条には「吉田社北三丁内有葬送之處」という記載があり、今回の調査区も、この葬送地の一郭に相当するのではないと思われる。これらの土壙墓は、その掘形がすべて南北に長く、SK3, SK4の木棺の主軸や溝SD5・SD6は、ともに真北から約8°東に振る方位を示し、ひとまとまりの遺構と考えられる。そうすると道路と溝の東に墓地が存在するという景観が想定されよう。溝SD4・SD5・SD6や道路SF3は不定形土坑に切られているため、砂の採取がはじまると、これらは廃絶していったはずである。この不定形土坑は調査区西半に存在し、東側の墓地には及んでいない。そしてその間に溝SD3が存在するのは、これが土地利用の境界となっていたためと考えられる。またSD3を切る土坑が存在するため砂の採取はSD3の埋積後も行なわれたのであろうが、それでもSD3を越えて東へ及ぶことはなく、SD3の示した土地境界の意義が13世紀後葉ごろまで持続していたのであろう。なお平安京・中世京都における葬地と墓制の歴史と展開については、第Ⅱ部第7章で論述し神楽岡周辺の葬地についても言及しているので参照されたい。

最後に2棟発見された竪穴住居跡について、その構造や性格などについて周辺の発掘例と比較検討を行なう。

地面を掘りくぼめて作る竪穴住居は縄文時代からの伝統をもち、東北・関東・中部の各地方では少なくとも平安時代まで存続しているが、畿内では6世紀末から7世紀初めには消滅し、掘立柱建物が一般化するといわれている。しかし、右京区花園鷹司町遺跡の発掘調査でも7~8世紀の竪穴住居跡が14棟検出されている〔鳥羽離宮跡調査研究所76〕。本調査区で検出した竪穴住居跡は花園鷹司町遺跡例より後出のものであり、また年代を正確に決定できる遺物が出土している。畿内中心部では、この時代の竪穴住居発見の報告はなく、京都盆地の平安京遷都以前の開発を考える上で重要な資料である。

さて山科区中臣遺跡では6~7世紀に属する竪穴住居跡が多数発見されているが、いずれも造りつけのカマドをそなえている〔中臣遺跡発掘調査団74〕。鷹司町遺跡ではカマドの存在が不明なものが多く、本調査区のSB1、SB2ではカマドは存在しない。造りつけのカマドのこうした衰退現象は東国では見られないことであり、こと京都盆地の竪穴住居に限っていえば、食物の消費が竪穴の各棟単位ではなくなっていったのであろうか。また視点を変えて、この竪穴住居を一般の住宅ではなく特殊な工房などにあてることもできよう。SB1、SB2を中臣遺跡、花園鷹司町遺跡例と比較した場合、その規模の小さいこともその可能性を示すものだろう。さらに周辺地域の調査結果を勘案して判断したい。

また調査区の北方約1.5kmには、奈良前期創建の北白川廃寺があり、鴨東北部に位置する京都大学構内一帯が古代豪族粟田氏の勢力下であったことが推定される。この北白川廃寺と竪穴住居SB1・SB2は、いかにも対照的であるが同時に存在したのであり、その解明は粟田氏の動向の解明と大きく重なり合うものであろう。このように今回発見した竪穴住居跡は、平安遷都以前の鴨東の開発と展開を解き明す鍵を握っていると考えられ、その考古学資料としての重要性を指摘したい。

〔注〕

- 1 本報告作成にあたって、追加調査については泉拓良のレポートをもとに五十川がこれをまとめた。
- 2 宇野隆夫の分類による〔宇野81〕。
- 3 類例は福岡県海の中道遺跡、平城京左京八条三坊〔奈文研76b〕、長岡京左京四条四坊〔京文研78a〕などにある。これについては九州大学文学部研究生市橋重喜氏の御教示を得た。
- 4 奈良国立文化財研究所枝官田辺征夫、巽淳一郎両氏の御教示を得た。